

## コングラト朝ヒヴァ・ハン国政権とイシャーン

塩谷 哲史

イシャーンとは、中央アジアに独特のスーフィー教団の導師の尊称であり、シャイフやピールに相当する。近年中央アジアのスーフィズムに関する研究は長足の進歩を遂げている。そして用いられる史料も、年代記のみならず聖者伝、シャジャラ、公・私文書、さらにはフィールドワークの成果と、多岐にわたっている。

本稿では、こうした研究動向に触発されながら、コングラト朝ヒヴァ・ハン国(1804-1920年)支配下のホラズム地方、およびトルクメニアにおける政治権力とイシャーンたちとの関係を解明する基盤となるべき情報を提供すべく、①19世紀コングラト朝ヒヴァ・ハン国で書かれた年代記史料に現れるイシャーンたちの活動を整理し、②当該時期のヒヴァ・ハン国周辺地域(おもにトルクメニア)におけるイシャーンもしくはスーフィーたちが主導した反乱に焦点を当て、その共通の性格を明らかにすることを目的とした。

①に関しては、コングラト朝ヒヴァ・ハン国政権とイシャーンたちとの関係を中心に検討し、以下の結論を得た。年代記史料に基づけば、官職の世襲などを通してコングラト朝政権内部に、制度的に特定のイシャーンの家系が取り込まれる事例は見られなかった。むしろ君主であるハン家と、サイイド・アタの後裔にあたる有力なイシャーンとの間で通婚関係を結ぶ事例や、ハンがホージャ・エリのようなホラズム地方の戦略的に重要な都市に居住するイシャーンたちを保護する事例、対外遠征に際して、ハンがトルクメン諸部族との交渉にイシャーンを起用する事例などが見られた。これらの事例から、コングラト朝政権とイシャーンたちとの関係は、ハンたちとイシャーンたちとの個人的な結びつきに拠っていたことが明らかになった。

②に関しては、4人のスーフィー、イシャーンの反乱の事例を取り上げて、共通の特徴を抽出した。具体的には、1807年ヘラート周辺で起きたカージャール朝に対するイスラーム・シャイフ(スーフィー・イスラーム)の反乱、1813年ゴルガーン地方で起きたカージャール朝に対するユースフ・ホージャ・カシュガリーの反乱、1841年同地方で起きたカージャール朝に対するハズラテ・イシャーンの反乱、そして、1849年メルヴのトルクメンを率いてコン

グラト朝に対する反乱を指揮したアブドゥルラフマーン・ハリーフアの事例を取り上げた。これらの反乱に共通の特徴は、反乱を主導したとされるスーフィー、イシャーんたちの多くが、中央アジアで最も有力なスーフィー教団ナクシュバンディーヤに属し、反乱参加者の間でイシャーんと呼ばれながら、奇跡を行うことで尊崇されており、おもにトルクメン諸部族の有力者と結びつくことで、その軍事力を動員していたという点である。

今後の課題は、イシャーんたちの相互のつながりを明らかにし、彼らの社会的役割、権威の基盤を明らかにすることである。それによって、政権が支配を及ぼす上で、なぜハンたちとイシャーんとの個人的結びつきを重視したのか、なぜイシャーんがときには反乱の原動力となったのか、という課題を明らかにすることができよう。そのためには聖者伝、シャジャラといった文字史料のみならず、口承伝承も活用していくことが必要となる。

(東京大学大学院博士課程)